

Bite The Dust

彩野

「すみません、今、何時か教えていただけますか」
あたしは腕時計を読む。

「五時をちょうど回ったところですよ」

そうですか、と質問してきた男性は頷いた。そして大きく笑いだす。

「どうかしたんですか？」

「いや、大丈夫です。賭けに勝ったもので、つい嬉しくなってしまうて」

「賭け、ですか？」

「はい、賭けです」

夕暮れどきにも関わらず、バス停にはあたしと彼しかいなかった。

気になりますか、と彼はたずねた。

そして、あたしが答える前から、信じられないかも知れませんが、と前置きをして、明朗な声で語り出した。

「実は私、悪魔に契約を迫られていたんです」

嫌そうな顔をするあたしに、まあまあ続きを聞いてください、と彼が言った。

「その契約の内容といいますが、巨万の富をやるか

わりに、自分の夫になれというものだったのです」

はあ、とあたしは生返事をする。

「どうやらその女の悪魔は、私に一目惚れをしてしまったようでした、金の代わりに一生自分の奴隷になれと、こういうわけです。当初、私はそんな人生まっぴらごめんだったのですが、そのとき務めていた会社が倒産したり、借金の保証人になった友達が逃げたりで、物乞いになるか奴隷になるかの二者択一を迫られていたんです」

奴隷になるのは嫌だ、しかし金は欲しい。そこで私は、反対に賭けを持ちかけたんです、と彼は勢い込んで言った。

「賭けの内容と言うのが、お恥ずかしい話なのですが、そのときの私は女というものを知りませんでした。だから、悪魔でも女性の誘惑に心が揺れていたのです。そんな私が、巨万の富を得たら、幾人もの女性に手を出してしまうかもしれない、それにお前は耐えられるのか、と問いかけたのです」

「それで、悪魔は何と答えたんですか？」

「『わらわの魔力があれば、そなたはわらわから離れ

ること叶わぬであろう』と言われたんです。だから言ってやったのです。見くびらないでもらいたい、お互いに愛を誓うなら、私はお前から離れることはないだろう、たとえ魔力なんかなくとも!」

男性は大きな身振り手振りを加えて話す。

「するとどうでしょう、その悪魔は『人間の、それも男のお前にそんなことができると思うのか』と、私の思惑通りの言葉を返してきたものですから、それなら私の決意を試すか、という賭けに、悪魔はすぐに首を縦に振ったのです」

十年後の今日まで、女性の手を取らない、という賭け。

「『できるわけがない』と悪魔は鼻で笑いました。

『もしも、それができるのならば、わらわはお前の決意を信じられなかった自らを恥じ、一生穴倉から出ることなく暮らしていこう』なんて言うのです。これは、私にとって僥倖に他ならなかった。悪魔はそのあとすぐに煙のように消えました。そして、その言葉通り、わたしのところに就職の話が転がり込み、トントン拍子に出世を重ね、ついに社長の座にまで昇りつめ、巨万の富を得ました。そんな私に、言い寄ってこない女

性はいませんでした。数多の誘惑が私の前にぶら下が
り、魅力的な香りを放っていました。取引先からの接
待も断り、ホモだと疑われながらも、私は十年間、寝
る間も休みも取らず仕事に打ち込むことで、純潔を貫
いてきたのです」

気が付くと、彼は涙を流していた。この十年の忍耐
の末に流れた涙に。

「そして今、やっと解放されました。私は悪魔の手か
ら逃れることができたのです。今頃、あの悪魔は暗く
湿った穴の中で、吠え面をかいている頃でしょう。私
はやり遂げたのです。十年は長かった。しかし、それ
により、私は財力と自由を手に入れた。もう、私を妨
げるものは何もない！」

「その、大変お喜びのところ申し訳ないのですが」
感極まり、天高く両手を突き上げた男性に、あたし
は、なるべく腰を低くして告げた。

「じつは、あたしの時計、十分進めてあるんです」
「へ？」

彼の表情が固まる。

「時間に遅れてしまわないように。だから、この時計

で五時九分だから、まだ五時になっていないんです」
五時着のバスが近付いてくる。時間通りだ、とあたしは思う。

さつきとは打って変わって、表情を失くした彼に対して、あたしは少し頭を下げた。

「ごめんなさい、もっと早く言えばよかったですね」
「いいえ、とんでもありません」

謝罪に対して、男性は穏やかな笑みを口元に浮かべた。
「なぜなら、約束の時間は、四時だからです」

停留所に着いたバスが、入口のドアを開ける。空気の抜ける音が響く。

「十年間、悪魔に縛られていたんですよ。いつか、悪魔の賭けに勝ち、こんなふうな女性を口説くことを夢に見てきた男ですよ、私は」

時間なんて確認済みなのです、と男性はバスのステップを上がり、乗り込む前のあたしの方を見やった。
「これから、あなたはこのバスに乗ってどこに向かわれる予定だったのですか？」

買い物、とあたしは答える。

「夕食のことは考えていましたか？」

首を横に振る。

「美味しい店を知っているのですが、一緒にどうですか？」

差し出された男性の右手に、ためらいながら自分の右手を重ねて、あたしは言った。

「そうやって、いつも女性を口説かれるんですか？」

「まさか、あなたが初めてですよ」

暖かい手を引き寄せて、貸し切りのバスの中、あたしたちは一番後ろの席に座る。

お互い、肩が触れ合うほど近くに。

ドアが閉まる。バスが重い腰を上げるように、ゆつくりと道路へ戻っていく。景色が動き出すけれど、手は握られたまま、まるでそこで会話をしているように、彼とあたしは、手の温もりを確かめ合う。

「渋滞も、たまには悪くない」

「どうして？」

「このバスが遅れてきたからこそ、君に会うことができたんだから」

「おかしな人、このバスは時間通りに来たわ」

「まさか、さつき停留所で確認したよ。土曜日には、」

「お仕事で疲れているのかしら。今日はまだ金曜日よ」

「……………」

「一日、間違えているのよ。さて、あたしの仕事はここで終わり。あとは運転手さんと、楽しい夜を」

あまりの驚愕に気を失った男を置いて、あたしはバスを降りる。すれ違いざま、彼はハンドルを握りながら小さくウィンクした。ご苦労様って意味かしら。

それとも、ごちそうさま？

了

Bite The Dust

初出 『混凝土の隙間と奇譚集 二巻』 2009年5月24日 発表

2010年5月9日 公開

著者 彩野

編集人 今出川潤

連絡先 vert@bugyo.tk

企画・制作 ver.T

<http://vert.bugyo.tk/>

このお話はフィクションです。
本作品に関する諸権利は著者自身に帰属します。
転載、引用される場合は著者および出典の表示をお願いします。